

松江市 報道提供資料

令和 6 年 11 月 25 日

件名 松江歴史館スポット展示『若槻禮次郎最後の漢詩「永別」』の開催

内 容 松江の雑賀町出身で島根県初の総理大臣となった若槻禮次郎は、昭和 24 年（1949）11 月 20 日に 83 歳で天寿を全うしました。本年は没後 75 年にあたります。禮次郎は総理大臣を引退後、静岡県伊東市の別荘で余生を過ごしました。晩年、自らの人生を振り返り、「永別」と題した漢詩に心境を記しています。

この度のミニ展示では、禮次郎最晩年の辞世の漢詩「永別」を初公開し、関連資料とともに禮次郎を偲びます。

会 期 令和 6 年 11 月 26 日（火）～令和 7 年 1 月 26 日（日） 開館時間：9:00～17:00

休館日：毎週月曜日（祝祭日の場合は翌平日）

年末年始 12 月 29 日（日）～1 月 1 日（水）

場 所 松江歴史館 基本展示室最終コーナー

料 金 基本展示観覧料（高校生以上：510 円 小・中学生：250 円）が必要

【問い合わせ】

文化スポーツ部松江歴史館 担当：新庄

電話：0852-55-5511

若槻禮次郎最後の漢詩「永別」

松江の^{さい か まち}雑賀町出身で島根県初の内閣総理大臣となった^{わかつきれい じ ろ う}若槻禮次郎は、昭和24年(1949)11月20日に83歳で天寿を全うしました。本年は没後75年にあたります。

禮次郎は政治家を引退後、静岡県伊東市の別荘で余生を過ごしました。晩年、自らの人生を振り返り、「永別」と題した漢詩に心境を記しています。

この度のスポット展示では、禮次郎最晩年の辞世の漢詩「永別」の実物を初公開し、関連資料とともに禮次郎を偲びます。



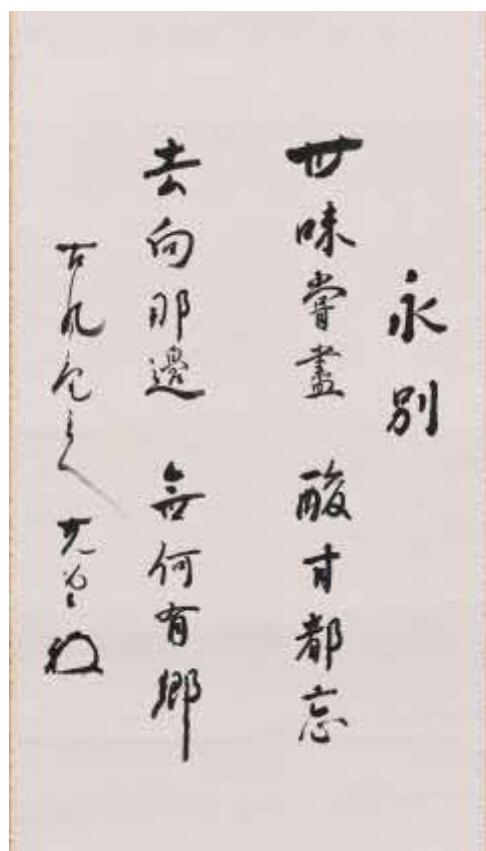
^{わかつき れい じ ろ う}
若槻 禮次郎

〈慶応2年(1866)～昭和24年(1949)〉

松江藩の足輕身分であった^{おくむらせんさぶろう}奥村仙三郎の次男として、^{さい か まち}雑賀町で生まれる。叔父である^{わかつきけい}若槻敬の養子となり、敬の娘の^{とく こ}徳子と結婚して若槻家を継ぐ。

若くから苦学し、敬の援助を受けて上京、帝国大学(東京大学)を卒業。大蔵省に入庁し、大蔵次官を務めたのちに政治家へと転身する。

総理大臣を二度拝命し、大正15年(1926)1月に第一次、昭和6年(1931)4月に第二次内閣を組織した。その後は昭和天皇を^{ほ ひつ}輔弼する重臣の一人として、一貫して平和主義を貫いた。政界を引退後は、静岡県伊東市の^{かんきよ}別荘に夫婦で閑居した。



永別

世味嘗尽

去向那边

酸甘都忘

無何有郷

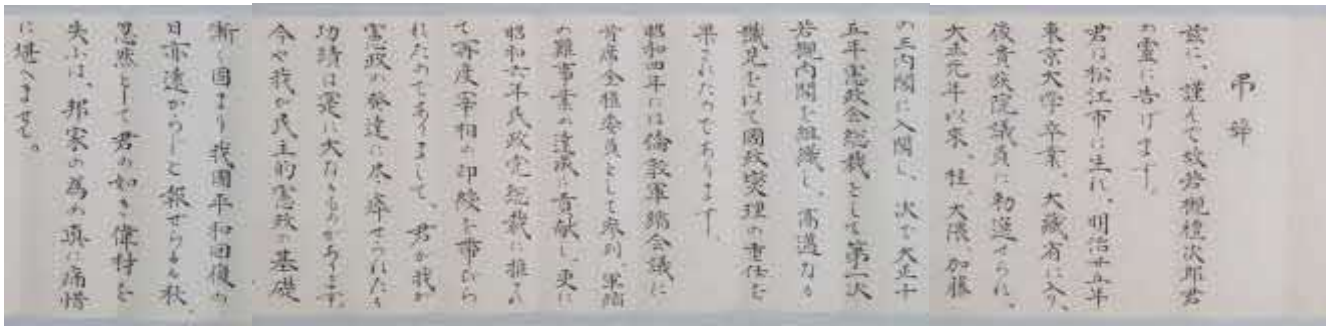
古風庵主人 克堂(花押)

^{わかつきれい じ ろ う}若槻禮次郎が残した最後の漢詩 ^{えいべつ}「永別」

禮次郎は亡くなる五日前に自らの人生を振り返り、「永別」と題した漢詩を詠んだ。「世情を知り尽くし、つらいことやよいこともすべて忘れてしまった。理想郷はどのあたりに行ってしまったのか。」という内容で、戦前・戦中を政治家として生きた人生をしみじみと思い返している。なお、文末の「古風庵主人」「克堂」はともに禮次郎の号である。

四言詩「永別」(若槻家所蔵(松江歴史館寄託))

昭和24年11月15日ごろ

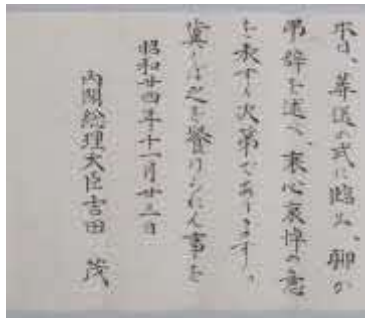


総理大臣 吉田 茂^{よしだしげる} による別れの言葉

11月23日、東京の護国寺で執り行われた葬儀に際し、当時の内閣総理大臣吉田茂^{よしだしげる}が若槻禮次郎^{わかつきれいじろう}の霊前で述べた弔辞^{ちようじ}である。禮次郎の業績を振り返り、ロンドン海軍軍縮会議での功績、憲政発展に全力を尽くしたことを述べ、その死は日本国にとって残念でならないと惜しむ。

吉田茂弔辞(若槻家所蔵(松江歴史館寄託))

昭和24年(1949)11月23日



写真で禮次郎^{れいじろう}を振り返る

禮次郎の死の翌月、週刊誌内で組まれた若槻禮次郎^{わかつきれいじろう}の写真特集である。右ページには禮次郎の学生時代や家族とともに写した写真、今回展示している漢詩「永別」が絶筆として紹介されている。左ページには政治家として活躍した頃や東京裁判に証人として出廷した際の姿、晩年や葬儀の様子を掲載する。

アサヒグラフ(館蔵、若槻家旧蔵)

昭和24年(1949)12月7日号